
サバイバル

竜太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サバイバル

【Nコード】

N9556A

【作者名】

竜太

【あらすじ】

平和だった毎日がたった一つの制度により、もろくも崩れ去り祐希たちは生き残るために…

はじまり（前書き）

中傷禁止デス 更新遅くなるかもしれませんが暖かい目で見てください

はじまり

あらかじめ書いておきますが、この話は作者が見た夢を参考に作っております。多少矛盾する点があると思いますが、完結できるように頑張りますのでよろしくお願いします。

ージリリリリ

朝っぱらからけたたましい目覚ましの音が鳴る

「あと五分だけ…」

そういつて布団から手を伸ばし目覚ましを止めた

…

…

それから三十分後

バババババツ

「んー。なんだ??」

ヘリコプターの音で起こされる

この少年の名前は『佐藤祐希』（サトウユウキ）。この町の高校に通う三年生である。

『おいおい朝っぱらから…ってもうこんな時間かよ!?!?!やばい!遅刻する!?!?!』

時刻は8時30分を指していた

祐希はいそいで壁に掛けてある学ラン・ズボンを身に着け部屋を出た。

祐希の部屋は二階にあるため階段を降りて行く

「なんで起こさなかったんだよ」

静かな家の中に祐希の大きな声が響く

しかし、誰からも返事がない

「かあさん??」

祐希は母親と二人暮らし。父親は2年前に交通事故で他界している

「まったく、朝っぱらからどこ行っただよ」

そっついながら、テーブルの上にある袋の中からパンを取り出し素早く口の中に放り込んだ。

そして大急ぎで家を飛び出した

「やばい!! やばい!! やばい!!」

そっついながら学校に全力疾走する

祐希の家から学校まで歩いて10分くらいである

「よしっ!! 間に合うかも」

携帯画面の時計をみていった

学校はもう目前である

しかし祐希はおかしなことに気がつく

「ハアハア…ん！？ 誰も歩いてない??」

祐希は学校までの道程で誰ともすれ違っていない

「まあいいや…ってあれ！？ 門が閉まってる??」

普段開いているはずの門が閉まっている

「学校休み??…なわけないよな…今日火曜日だし」
その時後ろから声が聞こえた

「祐希か？」

「悟!!」

この少年の名前は『大山悟』（オオヤマサトル）祐希とは幼馴染みで親友である

「なんで学校閉まってんだ??」

「お前テレビ見てなかったのかよ!？」

「今日は遅刻しそうだったからな。なにかあったのか??」

「それは…」 「話すより見た方がいい、俺ん家にこい」
そういつて悟は歩き出す

「おい！！までよ…」

そういいながら悟の後をついて行く

それから五分後 悟の家についた

「まあはいれって、誰もいないけどな」

「おじゃまします」

「ここに座ってくれ」

そういつてソファーに目をやる

「おう…それより見た方がいってどという意味だよ」
悟に問い掛ける

悟は無言でテレビのスイッチを入れた

テレビの画面に男のアナウンサーが映る

「今日11月24日、コクジョウシマ告城島がS級死刑囚開放場所に選ばれました」
告城島は祐希たちが住む島である

「死刑囚開放とは、国会で決められた新しい制度です。現在我々日本国は人口の大幅に悩まされています」

確かに2036年の日本は30年前よりも1億人近く人口が急激に増えている

「このまま増え続けると我々日本国の環境破壊が進み、あと20年としないうちに日本国は崩壊してしまいます。そこでS級の死刑囚を栄えてる島に開放するという制度です」

確かに告城島は小さい島ながらも、観光スポットとしても有名でいまもとても栄えてるといっても過言ではありません

「告城島には、中学生から高校生以外の老人・成人男性・成人女性・小学生と小学生以下の民間の人たちは本島に避難しています」

「中学生・高校生の皆さんは、いまからS級の死刑囚を開放するので、自分の身は自分で守って下さい。救助はきません。本島にかかる橋も自衛隊が完全封鎖しています。強行突破しようとすれば、射殺されます」

「なんだよそれ…ふざけんなよ!!」
ガンッ

祐希はテーブルを両手で叩く

「死刑囚の開放時刻は…午後の12時となっております。それでは健闘を祈ります」

ブッン

悟がテレビの電源を落とす

悟

「大変なことになっちまったな」

祐希

「どつという意味だよ…まぢ意味わかんねーよ」
頭をかかえる

悟

「よつするに俺たちは見捨てられたんだよ」

祐希

「そういえばかあさんは!？」
そういつて頭をあげた

悟

「さっきいつてた通りだよ。中学生・高校生以外は本島にいつちま
った。俺のおふくろと親父も自衛隊のやつらに連れていかれちまっ
たよ。ヘリの音聞いただろ」

祐希

「そういえば…」

朝ヘリの音で起こされたことを思い出した祐希
「ちくしょう!! なんて俺たちがこんな目に!？」

ーピンポーン

悟の家のチャイムになる

悟

「おっ、きたきた」

そういつて玄関のドアを開くーガチャー

開いたドアから三人の男女が入って来る

寿人

「オッス!」

ナカムラヒサト

中村寿人祐希たちと同じ学校に通う同級生でお調子者

奈緒

「おひさ〜!! って久しぶりでもないか!」

サワムラナオ

沢村奈緒同じく祐希たちと同級生、身長が高くて可愛いけど気が強い。空手を習っている。

朱里

「お邪魔します」

ナカムラアカリ

中村朱里中村寿人の妹で高校1年生

寿人

「おつ、祐希もいるじゃん。てかテンション低っ!!」

そういつて祐希のとなりに座る

朱里

「そりや無理ないよ。朝起きたらいきなり死刑囚を放して私たちを殺しにくるっていうんだもん」

奈緒

「そうそう、テンションだつて低くなるさ!!」

祐希の肩をポンポンと叩く

寿人

「俺はいつでもテンションMAXだけだな」

悟

「寿人は緊張感なさすぎ、ただの馬鹿なんだよ」

みんな頷く

寿人

「ひどっ」

みんな

「あっははは」

祐希

「あゝ！！お前らの話し聞いてると、なんか俺だけ悩んで馬鹿みたいじゃん」

寿人

「そうそう、馬鹿なんだよ」

みんな

「お前がいうなよ」

みんな一斉に突っ込む

悟

「そんなことより、これからどうするか決めようぜ」

朱里

「死刑囚が放されるまで一時間しかないよ」

時計をみながら朱里がいう

奈緒

「そうね、寿人！！あの紙もってきた？？」

寿人

「ああ、持ってきた」

そういつてポケットから紙を取り出す

祐希

「なんだこれ」

奈緒

「祐希、アンタみなかったの？じゃあ寿人読んで」

寿人

「へいへい、なんで俺が…ブツブツ」

奈緒

「なんかいった？」

そういつて寿人を睨む

寿人

「なんでもないです！！」

寿人

「じゃあ一回しか読まないからちゃんと聞けよ」

そういつて紙に書かれてる内容を読み始めた

- ・この死刑囚を開放する場所は告城島を含め、全国5カ所で行われる
- ・この制度は3年に一度実施される

・開放される囚人はS級であること（〃人を20人以上殺しているもの

・封鎖された町の至る所に武器がある

・当初の予定では期限はなかったが三日間生き残った物は救助される・囚人の数は50人

・では健闘を祈ります

寿人

「…まあこんな感じだ」

祐希

「三日間耐えれば助かるのか」

悟

「とりあえず武器さがしにいきましょう」

そういつて悟が立ち上がる

奈緒

「そうね！！囚人たちも武器手に入れるだろうしね」

朱里

「じゃあいきますか」

そういつて奈緒と朱里も立ち上がった

祐希

「絶対生き残ってやろうぜ」

寿人

「当たり前っしょ」

そういつて祐希と寿人も立ち上がり悟の家を後にした

これから起こる悲惨な出来事をこの五人は知るよしもなかった…

第2話

ここは告城島の都心、奥町。^{オウマチ}時刻はすでに11時半を指していた。囚人が開放されるまで残り三十分。

寿人

「誰もいないなあ。みんな隠れてんのかな??」

祐希たちは、悟の家を出たあと都心の奥町にきていた

悟

「確かにここにくる途中誰とも会わなかったな」

そういつてあたりを見回した

朱里

「しょうがないよ、ただでさえ人口が少ないのに大人たちがいないんだからさ」

この島の中学生・高校生合わせてもわずか200名たらずしかない

祐希

「そんなことより、まず武器を探そう。丸腰で囚人たちを相手にしたら、あきらかに部が悪い」

その時―

奈緒

「なんかあつたよー」

ピンと張り詰めた空気の中、奈緒の声が響く

寿人

「まじかよ」

寿人に続き奈緒の周りにみんな集まる

そこには大きめの黒いバックが置かれていた

朱里

「この中に武器が…」

祐希

「あけるぞ」

そういつてファスナー式のバックを開いた

バックの中には

・ナイフ3本

・ハンドガン2丁

・弾丸200発

・金属バット

・手榴弾5個

が入っていた

悟

「そんなに入っていないなあ」

そういつてバックの中からハンドガンを取り出した

奈緒

「ちよつと！！危ないわよ」

悟

「大丈夫、まだ弾入っていないし、安全装置も解除していないからね」

そういつてハンドガンを構えて撃つ振りをする

寿人

「じゃあ誰がどの武器を持つかだな」

話し合いの結果

祐希：ハンドガン・手榴弾一個
悟：ハンドガン・手榴弾一個
寿人：金属バット・手榴弾一個
奈緒：ナイフ2本・手榴弾一個
朱里：ナイフ1本・手榴弾一個
となった

あと朱里が見つけた防弾チョッキをみんな着けた

朱里

「なんかいいよって感じだね」

寿人

「大丈夫、兄ちゃんが守ってやるよ」

そういつて朱里の頭をなでる

運命のときまであと5分

祐希

「おい！！ヘリがとんでくるぞ」

みんな上空を見上げた

そこには5機のヘリがあった

悟

「まずいぞ！！こっちにくるみたいだ」

奈緒

「とにかくここから離れましょ！」

寿人

「そうだ！！学校に行こう！！もしかしたら誰がいるかも」

そういつて学校のほうを指差す

祐希

「じゃあ決まりな」

みんな学校の方向に駆け出していった

それから五分後…

凄い風を起こしながらヘリが祐希たちが、さっきまでいた場所に五機着陸した

ガチャー

ヘリの中から目隠しと手枷足枷された囚人が10人ずつ現れた。その後ろから武装した自衛隊員が三人現れた

目隠しをさせたまま、三人のうちの一人が話し出した

自衛隊員

「先ほど話した通り、お前たちにはこの町に残った者たちを殺すことを許可する。それと、多く殺したの中から上位3名は釈放する」

囚人

「どうやってら殺した人数なんか分かるんだよ？」

囚人の一人が尋ねる

自衛隊員

「殺したものの右腕を持って来るんだ。武器は一人一本ナイフを支給する」

囚人

「おもしれえ」

自衛隊員

「ほかに武器はこの町のどこかに置いてある。期限は三日だ。一人でも多く殺すんだ」

説明が終わると、囚人たちの目隠しと手枷足枷は外ずされ自衛隊員たちはへりに乗り飛びさっていった

囚人たちはへりが飛びさっていくと、バラバラに散っていった

しかし、その場に3名だけ残った

「おい！！お前ら名前なんていうんだ??」

「うっせーな」

「そついうてめーこそなんて名前だ？」

「ああ！！生意気な野郎だな。まあいい、俺の名前は数山大だ」
カスヤマダイ

数山大、32歳。地下鉄で23人を無差別に殺害。S級の死刑囚

「俺は、シンリユウイチ真隆一。シンリユウジこいつは弟の真隆二だ」

真隆一・隆二、21歳と19歳。兄弟で強盗殺人を繰り返し、29人を殺害。S級死刑囚

大

「ほう、兄弟とは珍しいな」

隆二

「なんかようかよ！？おっさん？」

隆一

「俺たち、殺したくてイライラしてんだよ。おっさん殺すよ？」

そういつてナイフを取り出す

大

「まあ待て！！俺もてめーらぶち殺してやりたいとこだけだよ、さっきの話し聞きゃー、殺しまくれば釈放されるって話しじゃねーか」

隆二

「ああ！！もう我慢できねえ！！兄貴、俺はこいつ殺すぜ！！」

隆一

「待て！……大、てめえはなにが良かったんだ？？」

大

「俺とてめーら兄弟で手を組もうって話した。そうすりゃ釈放される可能性大だ。少なくとも悪い話しじゃねえと思うぜ」

隆一

「確かに少しは効率があがるかもしれんな」

隆二

「兄貴！？正気かよ！！なんでこんなクソ野郎と？？」

隆二は隆一につかみ掛かる

隆一

「考えて見ろ、またあんなくそ寒いむしよに戻りたくねえだろ？それに俺たち、死刑囚だぞ？もどつても殺されて終わりだ」

隆二

「わかったよ、でもおっさん！！俺に指図したらぶち殺すからな」

そういつて大にナイフを向けた

大

「じゃあ決まりだな、早速武器を探そう。こんなクソナイフじゃ、蠅も殺せん」

大は支給されたナイフを投げ捨てた

隆一

「じゃあ武器さがすぞ、付いて来い」

ついに生死を賭けた殺しあいがいま始まった

第3話（前書き）

なんか無理やりぽいかもしれませんが、そこらへんはすみません

第3話

囚人たちの乗ったヘリが着陸するころ…

祐希たちは学校の門の前に来ていた

祐希

「ヘリ着陸したみたいだな」

ヘリが着陸した方をみる

奈緒

「とにかく学校にはいりましょ！！クラスのみんないるかもしれないし」

祐希

「よし、いくぞ」

祐希を先頭に校舎に走って行く

そして玄関からみんな入っていく

朱里

「静かだね」

寿人

「そうだな、おい誰かあゝいないのかあ?？」

大きな声で叫ぶ

その時生徒会室のドアが開いた

???

「静かにしてくれないか?？」

眼鏡をかけて、いかにも優等生な生徒が現れる

寿人

「花城!？」

ハナシロカズヤ

花城一也祐希たちの通う高校の生徒会長

一也

「大きな声ださないでくれ！！囚人たちが近くにいたらどうするだ！？」

悟

「ごめん、ごめん、ここにいるのは会長一人だけなのか？？」

一也

「いや中に生徒が7名いる。とにかく中に入ってくれ」

そういつて祐希を中にいれドアのかぎを閉めた

一也がいった通り生徒会室の中にはここの高校の生徒がいた

祐希

「たったこれだけしかないのか？？」

一也

「僕が学校にきたときにはもつといたけど、みんな川滝山カワタキヤマに逃げたみたいだよ。それよりこれをみてくれ」

そういつて机の上にあるパソコンを祐希たちのほうへ向けた

――囚人リスト――

パソコンにはそう書かれていた

朱里

「なんですかこれ？」

一也

「この島に離される囚リストだよ。いままで犯してきた罪と囚人のランクが載っている」

祐希

「そんなのがあるのかよ!!」

祐希たちはパソコンに映る囚人リストをみていく

奈緒

「あっ」

悟

「どっした!？」

奈緒

「このひと知ってる、二年前くらいによくテレビで報道されてた」

奈緒が知ってるといった囚人の名前は…沼木流砂^{ヌマキリユウサ}27歳。18歳から22歳まで、陸軍に所属し、暴力事件を起こし解雇。その後、女の子供を狙った殺人を繰り返し被害者の数は200名以上。超SS級の死刑囚である。

寿人

「俺もみたことある…こいつはやばいって……」

一也

「ほかの囚人もS級だけど、沼木流砂だけは別格だよ。とにかく死にたくなければ逃げることだね」

その場の空気が重くなる。中には泣き出す生徒もいる

—つぎの瞬間—

ドーンッ

遠くでなにかが爆発した音が響く

祐希

「ついにはじまったか…」

—その時—

「もういや!!!!」

一人の女生徒が立ち上がって部屋から出ていく

「おいっ!!!待てよ」

その後を追うようにさっきの女生徒の彼氏があとを追う

奈緒

「ちょっと!!!外は危険なのに」

一也

「追いかけよう」

祐希たちもあとを追いかけていく

祐希たちが玄関についたころ、さっきのカップルは校門のところで言い争っていた

「どこにいくんだよ!!!!」

「もうウンザリよ、なんで私たちがこんな目にあわなきゃいけないのよ」

「でも外にでたらもつと危険なんだぞ!!」

その時――

朱里

「あぶない!!!!!!」

カップルの方に叫ぶ

「私かえるう…あつ!!」
ばきよ

あたりに変な音が響く

なんと女の頭に斧が刺さり大量の血が吹き出す

男生徒は大量の血を浴びる

「うわー!!!!!!」

男生徒は叫び逃げようとするが、門から一人の男が現れ首を女生徒の頭から抜きとった斧ではね飛ばした

男の首の部分からは血が吹き出だしてビクビクと痙攣しながらその場に崩れ落ちた

「アッハッハッハッハ！！！」

二人を殺した男が急に笑い出す

悟

「なんだよ、あいつは！？」

奈緒

「沼木流砂よ……」

奈緒の顔は真っ青である

ザクツザクツザクツザクツザクツ

流砂は二人の死体を切り刻みバラバラにしていく

朱里

「怖い…」

朱里の声が震えている

祐希

「あんな楽しそうに人を殺すなんて…あいつ狂ってるぜ!!」

一也

「とにかく逃げよう」

祐希たちは再び校舎の中に入ってしまった

流砂

「あー、気持ちいいー!! そうだ、指一本もらっとくか」

そういつて二人から小指を切り取る

ルールでは、腕をもちかえるだったがおおきすぎるため体の一部でもいいことになった

流砂

「まだ、殺したりねえな」

そういつて血の付いた手を舐め回す

斧を取って腰に差して学校の玄関に向かって歩いて行く

その頃祐希たちは…

ガチャッ

一也が勢いよく生徒会室のドアをあける

一也

「きみたち！！逃げるよ」

中にいた生徒に呼び掛ける

「会長！！沼木流砂が学校の中に入ってきましたよ」

高校二年生の女生徒が話しかける

一也

「そうか、とにかくここは危険だから裏門から逃げるよ」

寿人

「いくぞ!!」

祐希たちと一也と残りの生徒たちは裏門に向かい走り出した

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9556a/>

サバイバル

2010年12月14日18時36分発行